

境界をめぐる思考

—— 国際社会学的な視点の社会学にとっての意味 ——

小 井 土 彰 宏

1 国際社会学という領域

私の専門は「国際社会学」と呼ばれる領域で、その中でも境界を越える人々や企業などの現象やそれが引き起こす変動や関連した政策の分析を専門とし、具体的にはアメリカメキシコ国境をはじめとする国境や社会的境界の研究に取り組んできました。国際社会学は、日本の社会学のなかで1970年代の末ぐらいに関心が芽生え始め、80年代の半ば以降研究領域としての輪郭を徐々に形成してきました。例えば、今年初めてこの分野でのかなりの数の研究者の研究をまとめた『講座 国際社会』という7巻からなるシリーズが東大出版会から刊行されますが、このような出版はいわば学問として一定の領域のまとまりと、分業が発達してきた証拠とも言えるでしょう。

国境を越えて動く人々が増え、さまざまな文化が国家の枠を超えて相互に接触する現在、「国際社会学」という名称をもつ専門研究の存在はそれほど違和感はないといえるかもしれません。新しい現象と社会的なニーズに答えて、新興分野が形成され、拡大していくのは研究のありかたとして「自然な」こととも言えるでしょう。その意味では、社会学が現代の社会の複雑化に対応して、労働社会学、都市社会学、家族社会学といった伝統的な専門領域に加えて、環境問題をめぐる運動やさまざまな組織の関連を対象とする「環境社会学」などと平行して国際社会学をその新しい専門分野として発展させてきた、といったいわば学問の進化的な見方もあながち外れてはいないでしょう。

しかし、国際社会学は細分化された社会学の学問体系の一特殊領域や、新規分

野としての意味以上のものを社会学にとって持っている、私には思えます。つまり、国際社会学が扱わざるを得ない問題群や、それに関する考察は、社会学の出発点につながるものであり、その提供する視点は社会というものの基礎的な成り立ちについて考察する材料を与えてくれるものだということです。それでは、国境を越える現象を対象とする国際社会学は社会学的思考にとってどのような意味を持つのでしょうか。

社会学という学問の特徴は、他の社会科学以上に、社会的現象の自明性を疑う点であると思います（コリンズ、1992）。社会というものを研究の対象にするには、自分の生まれ育った「社会」を自然のもの、所与のものとする感覚が崩れなければなりません。社会学の誕生は、19世紀初頭とされていますが、それはこのような自明性の解体が産業革命とフランス革命の衝撃の中で進んだからといえるでしょう。元来、既存の社会制度に取って代わる制度を想像することが困難であったのが、このような歴史の変革期には、元々の社会制度が現実的な妥当性を失い、それがあろう社会制度の一つに過ぎないという感覚が広がったわけです。それは、たとえばアンシャンレジーム（旧制度）という言葉が集約的に表現しています。そして、今日戦後に形成された諸制度をさすのにこのアンシャンレジームという言葉が頻繁に使われるのも、同じような自明性の解体が日本において過去10年ぐらいの間進行してきている証拠でしょう。

したがって、社会学にとっての一つの基本的なアプローチは、歴史的な変動の中で制度や構造を捉えることです。しかし、このような時間軸の中での相対化と並んで重要なのは、さまざまな並存する社会の比較です。現在に至るフランス社会学の基礎を作ったエミール・デュルケームは、「あらゆる社会学はある意味で比較社会学である」とまでいいました。違う社会との接触、そこにある異なる制度、社会行動の様式を観察することは、自分たちの制度や論理の捉え返しを要求します。19世紀までにヨーロッパ人たちはその外側に広がる社会（例えばアメリカ大陸、オーストラリア）の征服、接触、観察を通じて、自分たちの制度の特殊性を認識するようになりました（例えば、普通学校では啓蒙思想家と教えられるモンテスキューはそのような社会制度の差を研究した「最初の社会学者」とも言

われます)。さらに、ヨーロッパ内の諸制度の相違の認識も深まっていきます。

このことは、日常的にもわかりやすいことでしょう。例えば、海外赴任したビジネスメンたちは、如何に日本的な制度や行動が特殊なものであるかについて熱っぽく語り、さまざまな海外外投資先の取引相手、現地管理職、従業員、などなどの比較に話の花をよく咲かせます。真剣な考察の対象となり、戦略に影響を与えることすらあるでしょう。同じようなことは、旅行者、「帰国子女」、留学体験者の間でも繰り返し行われているのはご存知のとおりです。そこには、いわば「比較社会的な」視点の端緒があると言えます。どんな経済、文化、政治的要因がどんな社会的な差をもたらすかを、システムティックではなくとも考察しているからです。

しかし、このような比較分析は、しばしば安易なナショナル・ステレオタイプ(単純化された国民性に関するイメージで、さまざまな事実をそれに合わせて解釈させてしまうような作用をもつもの)の形成を促します。つまり、実際は国民といってもその内部構成をみれば多様で、千差万別の集団や地域からなっているにもかかわらず、際立って違う集団との比較の中で、それが単純化され同質なものと思われるてしまうということがしばしば起こります。そして、いったん形成されると、そのようなステレオタイプはお互いに支えあって、維持されるとともに、そのことをとおして「国民」と単位自体の自明性を増幅することにもなります。相対化の機能を持つはずの国際比較の視点が、多様性を認めながら、既存の国民社会の固定的で一面的な理解を逆に促進する皮肉な現象、このようなことは頻繁に起こりえます。例えば、ドイツ文化とフランス文化の対比、日米比較論など、文化をめぐる議論はそのようなステレオタイプの宝庫でしょう。

国際社会学が貢献できるのは、単に社会の一部で進んでいる新しい「国際化」現象を分析して見せることだけではありません。そのことを通して社会の相対化、それも既存の「国民国家」を中心に累積してきた社会についてのステレオタイプ問い直していくことです。しかし、そのような既存の国民社会の捉えなおしの可能性は国際社会的な研究のどのような点にあるのでしょうか。単に抽象的に国民国家中心アプローチを批判するのではなく具体的な考察の糸口としては何があ

るのでしょうか。私は、それは境界領域の構造や越境する人間たちの存在の形態を具体的に問い詰めることに他ならないと思ってきました。

2 境界地域への着目

実は、このような境界から社会を再認識するという発想自体は決して社会学にとって新しいものではありません。例えば、現代でも大きな影響を持つ社会学者マックス・ウェーバーは、比較社会学的な研究が同時に、深刻な認識する人間の問題を含んでいることを明瞭に理解していました。彼が、膨大な歴史比較社会学の研究者であると同時に、社会科学の認識論についての考察者であることはよく知られています。この二つの側面は分かちがたく結びついています。彼にとって、認識論的な課題は、同時に具体的な社会にどんなスタンスで臨むかという距離のとり方の問題でした（ウェーバー、1904=1998）。しかし、彼のユニークな点はこれを社会科学をする人間にとっての課題とするだけでなく、歴史的な具体性の中で、そのような認識がどこで発生するかについて考察している点です。彼がこのような関心の中で分析の対象としたのは、境界人 *marginal man* と呼ぶべき、大文明の周辺部や文明間の境界地帯に生を受けた人々でした。例えば、次のような歴史社会学的な考察は、宗教に限らず様々な知的革新について、このような視点を端的に表現しています。

あらゆる合理的な文化のそれぞれの中心点においては、いまだかつて完全に新しい宗教思想の成立したためしはほとんどなかった。ではいったい合理的な予言やもろもろの宗教改革の新形成がまず最初に現れたのはいずこであったかといえば、それは、バビロン、アテナイ、アレクサンドリア、ローマにもあらず、パリ、ロンドン、ケルン、ハンブルクにもあらずして、むしろ〔中略〕文化地帯の周辺地域においてである。しかし、そうはいっても隣接せる合理的文化の影響や印象が一つもないような場所でもいまだかつてそのような現象は起こらなかったことはもちろんである。その理由は常に同一である。宗教的な新しい思想が可能とせられんがためには、宗教固有の問い

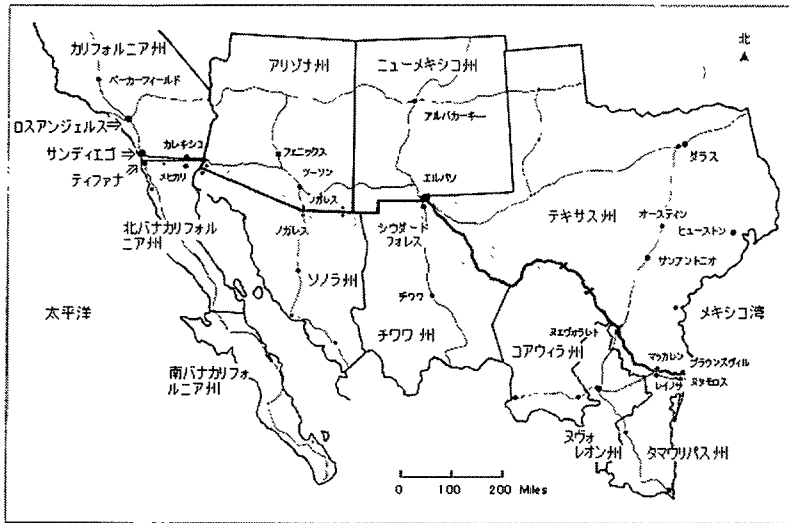
をもって世界の出来事に対局することがまだ忘れ去れてしまっ^てはならないのである。大文化中心地から遠くはなれて生活している人間こそは、ひとたびその文化の影響が彼らの中心的関心のなかに接触しはじめ、その心を動かし始めるか、脅かしは始めるかする時には、そうしたチャンスを与えられるのである。なんといっても文化に飽和している地域のただなかに生活し、その文化の技術にまきこまれている人間には、ちょうどたとえば、毎日電車で通学することに慣れっ^こになっている子供が、いったいどうして電車が走り始めることができるのか、というような問いにみずから思いつくことが現実にはほとんどないであろうように、周辺世界に対してかような問いを提出することはないであろう。世界事象について驚嘆する能力こそは、この事象の意味を問うことを可能にする前提条件である。

(Weber, M.. 1921=1962)

一見すると過去の歴史について語っているように思われるかもしれませんが、彼が強い関心を寄せているのは、社会を認識するための戦略的ポジションについてです。つまり、接触しながらも完全に一体化せず、どこかに内面的な距離感を、そして緊張感を保つことが、社会や文化を認識することにとって決定的に重要な態度であるという主張です。そして、彼はそれを主体的な努力によって保つことを研究するものに要求すると同時に、そのような認識が特定の社会環境の中で——例えば文明に隣接する周辺地域や二つの文明の中間地帯（エジプトとメソポタミアの間に位置する古代イスラエル）など——で、獲得しやすくなると考えたのでした。

グローバル化という言葉が現代社会のキーワードになってから、ボーダレス＝国境の消失という言葉が注目を浴び、その中で現実にはいまだに国境が強い規制力を持っているという認識も対抗して出され、国境に関しての関心は高まってきました。こうした中で、具体的な研究も徐々に拡大し、国境地帯の社会に関する理論的な考察も増えてきています。この中で、私自身は、アメリカとメキシコの国境に注目してきました。この国境地帯は世界にある様々な国境地帯のなかでも

アメリカ合衆国—メキシコ国境地域



現代世界の構造を考える際に戦略的な意義を持っています。まず、世界唯一のいわゆる先進国と途上国の陸上国境であり、特に世界の基軸的経済と国家に典型的途上国が接するという点で、特異な存在です。つまり、この地帯は南北問題のこれ以上ない縮図であるといえます。第二に、ここは膨大な資本が北から南へ移動し、逆に夥しい移民たちが南から北へ移動していく、両方向の通過点（線）です。第三に、一方でこの流れのうち投資や貿易に関しては、規制がますます撤廃され、他方移民規制に関しては規制が近年強化されているというパラドックスがあります。

これらの点は確かに国際政治経済上の重要な意味を持っていますし、私自身このようなことを随分強調してきました。しかし、これらの目的があったかもしれませんが、国境地帯の中に入り研究を開始すると、決して戦略的重要性では語りつくせない意味をそこでの経験はもっていることに気づかざるを得ませんでした。つまり、具体的な存在としての国境地帯で生活し、それををめぐる社会、人間を

観察することは、我々が日常で前提としている社会の仕組みを完全な外側でもなく、また完全な内側でもない視点から考えることを強いるものであるということなのです。それは、先に書いたウェーバーが関心をもち続けていた構造上の位置に自らをおくことに気がきました。以下では、国境で見たこと考えたことをとおして、国民国家を中心とした社会の捉えなおしについて考えて見ましょう。

3 国境都市の風景

南カリフォルニアに国境をはさんで隣接するメキシコの町、ティファナ。ティファナの朝は早い。初めてこの町に滞在して、調査をし始めたころ、メキシコ人の大学院生たちと同じ下宿屋に住むことになった。朝5時ごろから、遠くから低い聾音が聞こえてくる。薄っぺらく硬いベットのなかで、浅い眠りの中にまだいるうちから、このうなり声が頭の中に響き始める。初め、それが何であるかはよくわからなかった。スペイン語を話すのに疲れ果てた脳をギリギリと痛めつける、その音がただ恨めしい。しかし、初めての朝、メキシコ人の院生二人と下宿のある高台の地区から近道をして、灌木が生え岩がごつごつした坂を降りてくると、その正体は一目瞭然だった。それは、延々と長蛇の列をなした渋滞する車の音だった。それらの車は、どれも中古だが、その中古の程度は千差万別で、10年物は当たり前、20年物も決して珍しくはなかった。ガタガタした上に、接続の悪い道路に車がひしめき合い、これらの車の古びたエンジンが、さまざまな音程でさまざまなリズムの振動音を鳴らす。さらに、この使い尽くされた車体、サスペンション、トランスミッションがギイギイときさまざまな金属音を合奏する。

この車の洪水のどこにバス停があるのだろうか、と思いながら道に下りてくると（そのころ創設されたばかりの研究機関に一緒に行くことになっているので）、メキシコ人の院生たちは、やおら片手を挙げ親指を突き出し、動かし始めた。そういきなりヒッチハイクを二人で始めた。「通学にヒッチハイク？そんなことがありうるだろうか。案の定、断られている。そうだろう。今日は遅刻でもしそうであせっているのだろう。」と安心(?)していると、5分もしないうちに乗せてくれる自動車が現れる。「マグレだろう、運が良かったのだ、とにかく一緒に

乗せてもらおう」と狐につままれるような気持ち同乗した。しかし、それは完全な私の誤りであった。その次の日も、さらに次の日もヒッチハイクは、必ず5分で成果を挙げ、ある日はフォルクスワーゲン、別の日はフォード、ルノー、日産の年代ものに乗乗することになった。(メキシコにはたくさんの自動車多国籍企業が進出しているので)このようなとらえどころない雑然とした光景の中で、私の途上国の研究は始まった。これが、私の初めての「途上国」体験であり、そこでの調査の始まりであった。

この雑多な中古車、バンのような小型バス、ボロボロのアメリカで使い古されたバス、これらの夥しい車の群れが運ぶ人たちが、経済危機にあえぐ典型的な途上国メキシコの生命線をなす外貨を獲得する工業を支えていた。そして、その工業の多くは国境の北側からの投資によるものだった。これらの毎朝繰り返される通勤の喧騒は、国境の北側と著しい対照をなしながらも、実はダイナミックに姿を変えつつあったアメリカ資本主義の鼓動が国境を突き抜けて大地を伝わって響いてくるものともいえた。実際、この下宿屋の裏手の別の高台には、ソニーの新鋭工場がその頃スタートをしており、この工場は10数年を経た今、同社のテレビの工場としては世界最大のものとして稼働している。

そして、現在それ以外の日系の諸企業、韓国系、台湾系、フィンランド、フランス……そしてもちろん膨大な数の米系の多国籍企業 transnational corporations がこの都市に投資して生産し、衣類・おもちゃからテレビ・オーディオなどの様々な製品をアメリカ市場をはじめとして国境を越えて、輸出している。これらの急激に拡大する工場群の周りには、南から流れ込んでくる夥しい数のメキシコ人労働者の住宅が雨後のたけのこのように立ち並んでいる。その住宅街のうちは、あるものは即席で建てられ、他のものは年数を経て、ブロックとセメントでしっかりと、しかし素人の手作りゆえに多少ゆがんで構築されている。この最新鋭の工場群とそこで働く人々の居住する雑多な住宅とその町並み、これの対照もまた訪れるものの目に焼きつく。しかし、このような雑然たる風景の根底にはグローバル化の端緒というべき過程が深く静かに進行しつつあった。

4 様々な境界線

この国境をめぐる景観も、アメリカからあるいは日本等から訪れる記者、ルポライターたち、すなわちメディアのレンズを通過すると、単なる南と北の貧富の格差のショー・ウィンドウと化してしまいます。だが、果たして単純にそのような二極的な構図で済むのでしょうか。国境を繰り返し横断し、この国境の南側と北側に交互に住んでみると、このような単純な二項対立的思考法では捉え切れない現実が見えてきます。

確かに、例えば高台に立って見下ろすと国境線は大地を切り裂き、両側の対比は強烈極まりなく、一方は近代的合理的建物で構成され、他方は雑然とした非合理で後進的な社会を絵に描いたような町並みです。しかし、実際の「社会」はそのような鋭角的な変化は示しません。南側に住んでいるとき、メキシコ側から国境を越えて歩いてアメリカ側に行き、自動車で高速道路にのらず、トロリーやバスを乗り継いで移動したことが何度もあります（もちろん効率的に行くには自動車です）。そのような地面に近いところを低速で移動すると、そこでの景観の変化は実にゆっくりしたものです。確かに建築学的な構造は違いますが、そこに居る人の形態的な特徴、しぐさ、生活水準は、国境の南側から連続的で、ゆっくりとしか変化しません。もちろん新しく開発の進んだ地域では、アングロ・アメリカ的な清潔で規格化された中産階級的な世界が広がっています。しかし、同時にかなり北の方までこのような景観は続くのです。そして、それは実は市の中心部にまで至ります。では、境界線はないのでしょうか。そうではありません。実は北と南の対比に対して、この太平洋岸の都市では、海岸からの距離による棲み分け、つまり日中の温度の高さと乾湿の差によって、アングロ系等のアメリカ人とメキシコ系などのラティーノスの棲み分けが厳然としてあります。かつて、このような都市社会の中での多様な人々の棲み分け構造を分析したのは、シカゴ学派と呼ばれるアメリカ社会学の一派でした。彼らは20世紀初頭の多民族都市シカゴを対象とし、このような研究を人間生態学 human ecology と呼びました。まさに、次第にそれぞれの環境に合わせて人間の集団があるものから他のものへと移

行してくというわけですが、この地域にはこのコンセプトが社会的な不平等もという観点においても、明確に当てはまります (Park, 1989)。

実は、このような棲み分けは国境の南側にのみ当てはまるものではありません。国境の南側は、バハ・カリフォルニア州といいます。日本語風に言えば下カリフォルニアという意味で、これに対しメキシコ人はいわゆる「カリフォルニア州」を“アルタ（上）・カリフォルニア”と呼ぶことがあります。それは本来メキシコ領であって統合されていた両カリフォルニア Las Californias の北側半分といった意味です。このバハ・カリフォルニアを海岸線に沿って南に移動していると確かにスペイン風なのですが、いかにも規格化された観光地風の住宅が続きます。実は海岸の眺めのいい地帯はほとんどアメリカ人が所有（厳密には長期賃貸）している別荘に押さえられ、メキシコ人たちは海岸から少し離れたところに居住し、農業などに従事しています。いわば、先ほどの生態学的な棲み分けの境界線は、国境を貫いて海岸線沿いに伸びているともいえます。

アメリカ社会にもう一度目を転じましょう。空間的な棲み分けとならんで、重要なのは言語的な壁でしょう。アメリカ社会では、現在ラティーノと呼ばれるラテンアメリカ出身者やその子孫（多くはスペイン後の話者）が、2000年の国勢調査で大体人口の12%に達し、アフリカ系アメリカ人を数で超え最大のマイノリティとなりました。これまでのマイノリティグループとの差は、彼らが国籍こそ異なれ多くの場合（ポルトガル語、フランス語、あるいは先住民語を話すものがあるにしろ）スペイン語を話すことでしょう。このため、国境の北側でもスペイン語は準公用語です。いたるところに *Se habla el Espanol*（スペイン語話します）の看板がかかっています。このスペイン語人口の増大は、アメリカ側で80年代以来英語公用語運動、バイリンガル教育批判という反作用を生み出してきました。つまり、スペイン語を話す子供たちの存在で公教育が麻痺し、英語を母語とする人たちまで教育が遅れ、また財政的にも負担が拡大しているという批判です（矢作弘, 1995）

このようなスペイン語の広がりの中で、独特の社会的境界線が出現しています。言葉の作り出す壁は、しかしそれほど単純ではありません。アメリカ側でバスを

乗り継いで移動した頃があります。そうするとあまりに不便なので、調査に出かけるのにどうしても非常に早起きして出発しなければならなくなったり、帰るのが遅くなります。ある日都心での用件が済み帰路について足早に歩いていると、一群の人々とすれ違いました、真っ暗なビルの谷間に男女様々な快活なスペイン語が響き渡りました。ビルの清掃を終えたグループが帰るところだったのです。もちろん夜中まで仕事をするチームもあります。ある研究によると、このようなカリフォルニアの金融業やハイテク企業のポストモダンなビルの清掃は、ますますスペイン語を話す人々、とくに正規の滞在許可をもたない「非合法」移民によって担われてきているそうです (Cranford, 2000)。実際、その後同じようなところを夜歩いたときにも同じ体験を何度もしました。また、朝早くバスで待っていると良く会うのも似たような職種で働きに行く、ラティーノ系の人々でした。日中は英語が支配する空間で夜や早晩の時間に響くスペイン語、それは話す言葉により縁取られた時間的な境界線といえるでしょう。

しかし、アメリカにしるメキシコにしる、かなりの規模の都市や複数の都市を調査するのにいつもバスなどに依存するわけにはいきません。ある時期からは、中古車で調査を行うようになりました。すると、目に見えてくる社会的光景が全く異なるのです。これは日本でもある程度妥当するでしょうが、幸か不幸か道路公団と行政のおかげで高速道路事情が悪くて、自己完結的でないため、いろいろな社会的遭遇の可能性があります。しかし、アメリカのように自宅などからあまり遠くないところに高速道路の入り口があり、そして目的地の近くのインターまでは、外界と隔離されるシステムが発達していると、出発点と着地点以外の社会への視線やコンタクトが遮断されてしまいます。ある意味では、この高速道路網こそ、アメリカ社会の不平等を覆い隠し、見たくないものを見なくて済ませるシステムとも考えることができるでしょう。このシステムに依存している限り、白人中産階級は快適な郊外や海岸地域の一戸建て住宅やコンドミニウムからポストモダン建築のオフィスまで直行しその中で、仕事と生活が完結できるのです。その間に存在する好ましくない住宅街や荒廃した地域が存在することすら知らなくて済みます。アメリカでは高速道路のことを freeway と呼びますが、この料金

不要 (=free) の道路は、それを利用できるものに自由に移動する権利を与えてくれますが、これに乗れない人々には極めて差別的な構造です。それぞれの人々には、別の社会的な世界が存在しているといっても大げさではないでしょう。自由な社会が持つ暗黙の社会的な排除機能、これが国境からみえてくる freeway system の二面性です。それは移動空間を巡る境界線ともいえるでしょう。

90年代アメリカでは、移民、とくにラティーノス移民に対する社会的な排斥運動が活発化しました。実は、この反移民運動の源泉には、ラティーノスたちが今まで観察していたような排除の構造によって入ることが難しかった空間へと浸透してきたことがあります。これに対して、アメリカの住民たちの態度は “Not In My Backyard” (NIMBY) といわれるものでした。自分の裏庭だけはやめてほしい、といった感情をあらわしたものです。このスローガンなども、裏返しにして言うといかに日頃は異質な集団との接触が最小化するように構造ができていくのがわかります。このような社会的な排除のメカニズムは、現在のアメリカ社会の中で急激に拡大し、組織的に作り出されています。例えば、gated community と呼ばれる、柵で囲まれ門で厳重なセキュリティーチェックがされ中の安全が図られるような民間で開発された住宅地区が全米で拡大中だそうです。あるカリフォルニアの研究グループによれば、gated community は90年代に急増し、90年代後半には全米で2,000に迫る勢いでした。そのようなコミュニティの存在は、必ずしも国境が社会的な境界線をなすのではなく、むしろそれに変わる新しい境界線が私的に意識的・組織的に構築され始めていることを示しているといえるでしょう (Bailey & Snyder, 1997)。

5 視線の回路付け

自分で南からアメリカ社会へ「侵入」をしてみると、そこでぶつかるのは今述べたようないろいろな社会的な壁でした。そのような壁はかならずしも南からの侵入者だけに向けられているわけではないのですが（国内のマイノリティや白人下層に対しても妥当する部分が多い）、北上移動を追体験してみると明瞭に認識できます。そして、そこで見えてくるのがアメリカ社会における「他者」への関

心の欠落です。北側に出てきて北側に住んでいる人たちと接して話してみると、研究でもしていない限り南側に関する知識はきわめて乏しいものです。およそ40 km ぐらいしか離れていない、国境を越え南側に行くのにパスポートのチェックすら必要のない社会に関してすらそうなのです。

さて、目を点じて北から南に移動するとしましょう。アメリカからメキシコへの人の移動で量的に最大なのは、ご多分に漏れず観光です。このティファナという町も日本でもアメリカでもいわば、サンディエゴへの観光とバックになった観光地として普通の人には知られています。ティファナが町として発達するきっかけとなったのは、アメリカの1920年代の禁酒法の制定であるといわれています。つまり、ピューリタンの清く正しい禁欲主義を北側で実践することで、皮肉にも南側はアルコールをもとめ命の洗濯にくる人々で賑わったというわけです。北側の道徳が南側の不道徳を作り出す、これは繰り返されてきた歴史です。例えば、サンディエゴはアメリカ太平洋艦隊の母港です。海上で禁欲的な生活をしてきた海の男たちが陸に揚がってのお決まりのコースが、南側ティファナへ行ってメキシコ女性と夜を楽しむというものでした。

現在、国境を越えて観光するアメリカ人たちの数は膨大ですが、彼らが向かう先はきわめて限定されています。「革命通り」というお土産物屋、酒場、ディスコ(クラブ?)といった店がひしめく地区か、あるいは近代的なモールや別の地区にあるいくつかのディスコのどちらかに向かいます。それらの外側でアメリカ人たちを見かけることは、アメリカとメキシコが自由貿易協定を結んでからでも限られています。そこで感じられるのは、両社会の接断面 interface の異常なほどの狭さです。これは、国境の南側の他都市でも同様で、観光客たちは仕切られた観光地区の空間に流し込まれ、そして週末が終われば帰って行きます。

このような観光体験の中で、定型化された異文化との接触の持つ意味については、近年人類学や社会学の中で活発に議論されるようになってきています(山下, 1996)。「観光人類学」「観光社会学」などと聞くと、1年生の諸君などは「そんな楽しそうなものがあるのか」とあまりまじめな印象をもたれないかもしれませんが、観光は今や世界最大級の産業で、航空産業－ホテル－レストラン－おみやげも

のの生産・販売といった一大経済複合体を形成し、特に途上国の経済・社会に大きな影響を与えています。また、最も大きな国際的な人の流れを生み出しているのも観光です。このような観光が、他の社会に関しての我々のイメージや視線に大きく作用するものであることは想像に難くないでしょう。巨大ビジネス化した観光システムは、ツーリストたちを日常から離れたフロー感覚を与えつつ、異文化に関しての単純化したイメージを提供し、それを確認する過程としてのツアーを構成していきます。メキシコ国境での光景は、このような極めて限定された接触をととして固定的なイメージが大量生産されていくことを、どこよりも明確に教えてくれます。

6 ちぐはぐな部品からなる構造をどう捉えるのか——境界論の意味

観光からはなれ、次にモノ作りの現場に目をやりましょう。先に述べたように、国境地帯には実に様々な国から企業が進出しています。通常、北と南の対照の中で、このような工業は、途上国の低賃金労働力を利用した先進国ではもう割りが合わないような工場が進出したものだと見なされますし、多くの報道がそのようなステレオタイプを強めています。しかし、これらの工場に足を運んでみると、その多様性に目を奪われます。それらの工場は、大小さまざまで、また技術的にも最新鋭と思えるものから、いかにも古めかしい手作業の作業所まであります。ある大工場では、アメリカでも一度も生産されたこともない大型のデジタルTVが続々と生産されています。別の工場では、DVDプレイヤーが大量に生産されアメリカ市場に次々に送り出されていきます。このようないわゆるデジタル技術を駆使した家電製品が驚くべきことに、既にこの途上国でかなりの数生産されているのです。もちろん、このような生産ばかりではなく、いかにも新興工業国らしいものもあります。別の工場ではディズニーのキャラクター・グッズの最新流行のものを生産しています。また、ある工場では女性用の様々な複雑な下着が生産をされています。入り組んだ町並みの中の作業場では、全くの手作業で女性たちがモノを生産しているところをみることができます。様々な技術レベルと市場をもった斑模様の生産が集積しているわけですが、そこには何も共通項がないの

でしょうか。たとえば、手作業の作業場を見てみましょう。一見すると「原始的」に見える作業で作っている物をたずねると、実はミサイルの制御用半導体であったりします。そのようなものは例外ではないかという疑念ももっともですが、実はこの地域では軍需用の特注電子部品生産が盛んです。

いろいろな現場の観察を積み重ねると、バラバラに見える現実から一つの傾向が見えてきます。それは、このミサイル用部品にしろ、新キャラクターのディズニー玩具にしろ、DVDにしろ、これらのものがマーケットに即応しなければならないということです。それらは、他のいろいろの次元で異なるにせよ、価格も重要ですが極めてタイミングに敏感な製品です。このようなコストダウンと市場即応のためにこれらの工場は、明らかに飽和状態でインフラ環境のよくないこの町へ、次々に進出してきたのです。

このような経済の新しい要請の中で、この都市は急激な膨張をとげ、先に書いたような、細部から全体までのちぐはぐな構造を持つに至ったのです。この国境の町は、アメリカの征服戦争によって国境が設定されたことにより形成され、あるときは酒、あるときは女性、あるときは戦時経済のための農業労働者を供給する窓口として、その役割をめまぐるしく変えてきました。この雑然とした町並みは、その時々アメリカ政治経済の要求に対応した結果が累積したものでした。一見すると単に遅れた社会として我々の目に映ずるこの都市は、実はダイナミックに自らを組換えていくアメリカ資本主義の変化の堆積物が作り出す構造体です。自らが作り出したものであるにもかかわらず、排出したものの堆積との対比で自分の優位を確認する、ここに支配的な立場にあるものの特徴があります。生み出したその北側もまた、既に見てきたように決して整然と秩序だった合理的な構造をなしているわけではありません。そこには、南に連続するものが組み込まれていながら隠蔽されてきました。そして次第に隠蔽しきれなくなっているのが現状です。このような社会を捉えるときに、できあいの概念やイメージはそれを理解するのに役に立たないばかりか、そのような現実から生み出されつつ、それを補強する機能を持つことがわかります。北と南の対比、言い換えれば「アメリカ社会」と「メキシコ社会」といった二項対立は、国境線上で考えるにつけ、極めて

曖昧なものであり、現実には様々な国境を貫いて人々を結びつけるネットワークと様々なレベルの境界線が存在することがわかります。

国境からみること、それは出来上がった認識の硬い枠をすり抜けて、現実の様々な支流に目を向けることです。しかし、同時に国境こそが硬いステレオタイプを生み出す現場でもあります。このステレオタイプが生成するプロセスそのものに入り込むことで、初めて様々な社会的な境界の編成が見えてくるのです。社会学は、様々な境界線——階級、身分、性差、民族、中心と周辺、正常と異常、健全と障害——がいかに構築されてきたかを分析することをその課題としてきました。国境から考えることは、そのような認識を再び活性化させる戦略なのです。国際社会学は、未だに我々を拘束する国民国家中心に編成されてきた社会イメージを問い直して行くための戦略的視点を提供するものです。その意味で国際社会学は、社会学の単なる応用分野ではなく、原点を問い直すための境界領域に位置しているといえるでしょう。

参考文献

- ウェーバー、M. 1922=1962『古代ユダヤ教Ⅰ』みすず書房
- ウェーバー、M. 1904-1998『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』
(富永・立野訳) 岩波文庫
- コリンズ、R. 1982=1992『脱常識の社会学』(井上俊 訳) 岩波書店
- パーク、R. 1922=1989『実験室としての都市』(町村・好井 訳) 御茶ノ水書房
- 矢作弘 1995『ロスアンゼルス』中公新書
- 山下晋二(編) 1996『観光人類学』新曜社
- Cranford, C. 2000. "Economic Restructuring, Immigration, and Labor Movement: Latina/o Janitors in Los Angeles." Center for Comparative Immigration Studies. Working Paper Series. No. 9
- Blakely, E. & Mary Gail Snyder. 1997 *Fortress America: Gated Communities in the United States*. Brooking Institution Press
- (一橋大学大学院社会学研究科助教授)